

本條秀太郎

端唄（江戸を聞く）

蜻蛉

いつもながら精力的な本條秀太郎による「端唄 VOL・36」が、7月31日に東京・紀尾井小ホールにて開催された。

今回のタイトルは「蜻蛉」。猛暑の最中ではあったが、すぐに立秋となる時節なだけに、涼やかな雰囲気醸し出す表題であった。この日も会場には年配の方から若者まで、多くの人たちが詰めかけていた。

第一部に「お祭り」「なすとかぼちゃ」「川風に」「夕顔の」といった、まさに涼風のごとき演目が並べられた。

端唄作品が連なっていくと、会場が座敷のような空気になり、本條と相対して唄や三味線を聞かせてもらっている気になる。

第二部では、「嘘と誠」（高尾太夫）、「心して」（鶴八鶴次郎）、「大津絵」（梅川忠兵衛）、「槍さび」（忠臣蔵）などなど、物語性のある端唄が披露された。

本来は、浪曲や浄瑠璃、小説や舞台を通して多くの人たちが見知っている題材だけに、短い端唄のフレーズで一気にイメージが膨らんでくるのだ。ある種の「本歌取り」ということか。

そのような歌われ方、楽しまれ方もまた端唄の一つの在り様だと、初めて知ることができた。

